

# 探訪 北の風景 59

## 銀河の森天文台 十勝管内陸別町

青木和弘

陸別町の開拓は1902(明治35)年に始まり、1919(大正8)年、前身となる陸別(りくべつ)村が誕生している。アイヌ語の「リクンベツ」は「高いところを流れる川」という意味で、「天の川」のことだという。ここは昔から星空にかかわりのある地名だった。

陸別は日本一寒いまちでもある。2月2〜3日には恒例の「しばれフェスティバル2019」が開かれ全国各地から多くの参加者が訪れた。今冬の全国最低気温マイナス31.8度は2月9日、陸別で記録している。陸別は林業と酪農の町である。現在の人口は2386人(本年1月末現在)だが、

1920年に実施した第1回国勢調査では5467人で、ピークは1955年調査の8793人だった。1949(昭和24)年に「陸別村」と改称し、1953年から陸別町になった。

陸別町のシンボルは「銀河の森天文台」である。正式名称は「りくべつ宇宙地球科学館」。一般公開型の天文台と、名古屋大学宇宙地球環境研究所の「陸別観測所」や国立環境研究所の「陸別成層圏総合観測室」が併設され、主に成層圏・対流圏の大気やオーロラ等の研究を行っている。

この天文台ができるきっかけは、1989年10月に現れたオーロラだ。太陽活動が極大期を迎え、陸別に見事な赤いオーロラが現れた。その写真が全国紙の1面トップを飾り、テレビや雑誌でも取り上げられた。これによって陸別町が「オーロラのまち」として世界中に知られるようになった。

当然、研究者たちは、ここに高感度カメラを設置して連続観測を続けられ、多くのデータが得られるに違いないと考えた。町は「まちおこし」の起爆剤にしようと、専門家を招いてオーロラについての町民向けの講演会を開いた。これで町と研究者らのつながりができ、公共天文台を建設しようという気運が生まれたという。



2016年8月12日、ペルセウス座流星群の観望に訪れた人たち。条件が良ければ40個以上の流星を見ることができるとい

銀河の森天文台ができたのは1998年7月7日。昨年、20周年を迎えたが、開館の準備に5年かかったという。この天文台を、立ち上げから牽引してきたのが館長の上出洋介氏である。小樽市出身で、名古屋大学名誉教授。オーロラなどの宇宙間物理学を専門とし、国内外の学会の要職を歴任する第一人者である。上出館長は、全国共同利用の研究所と公共天文台が一つ屋根の下に同居するユニークな科学館について、学術研究の場であるとともに、住民には「学校で教えないナマの科学を体験し、宇宙での人間の立場を考え直す場所。ここで自然との対話を楽しんでほしい」と広く呼びかけている(りくべつ天文台だより2018夏号)。

この天文台、難しい理屈は分からなくても星空を楽しめる。何せ、日本最大級の115センチ反射大型望遠鏡や、大型双眼鏡などで、その時期に見ごろの惑星や月、遙かかなたの星雲や星団、銀河などを、解説付きで見せてもらえるのだ。今年





天文台と天空を赤く染めた低緯度オーロラ=2004年11月8日。1月下旬から2月初旬には、カナダのイエローナイフからのオーロラ生中継を天文台のプラネタリウムで見ることができる。本稿の写真はすべて銀河の森天文台提供

おおぐま座のしっぽのあたりにあるM51銀河。二つの銀河の形が大小で親子のようなので子持ち銀河と呼ばれる。距離…2500万光年



の3月はまだ火星や天王星が見られ、7〜8月は人気の木星や土星もばっちり見られる。昼間でも晴れていれば明るい恒星を見ることができる。

1階の展示室には、オーロラや星雲などのパネル展示や、宇宙探検コンピュータや、70インチ大型モニターによる宇宙の体験番組で楽しく学習ができ、土・日・祝日にはプラネタリウムも観賞できる。今シーズンは終わったが1月下旬から2月上旬に「オーロラウィーク」が開かれ、カナダのイエローナイフのオーロラを生中継し、プラネタリウムで見ることが出来る。専門的になるが研究所の取り組んでいる研究内容や、初期のころの「宇宙線」の観測実験などが分かりやすく展示されている。